

前回は、人間、そして男と女の誕生について書きました。神と人間、そして男と女は、互いに〈パートナー〉として造られたのでした。今回は〈男と女〉の出会いと、その《性》がもつ意義を考えてみようと思います。

### 《「あばら骨」としての相手》

前回の『創世記』第2章で、『主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた』という箇所がありました。「うん、どこかで聞いたことがあるヨ」と思われた方も多いはずです。特に女性の方は、「あたしたち女は、男のあばら骨からできたですって?」「だから男は女に対してデカイ態度をとるようになったんじゃない?」なんて考えた方もいらっしゃるのでは? それはともかく、じつはこの〈あばら骨〉には、ふか〜い重要な意味があるのです。これについて、カルメル会修道会司祭・中川博道師の文を読んでみましょう。

「あばら骨」と訳されたヘブライ語の語源には〈側面〉という意味があります。『〈側面〉という現実 … それ自体として単独では絶対的に存在できないもの』で、『一つの〈側面〉はそれを支えているもう一つの、あるいはいくつもの〈側面〉と対を成して初めて存在することができます』。

### 《「私」から「私たち」へ》

中川師は、「手のひら」と「手の甲」というふたつの〈側面〉は、両面が合わさって初めて「手」になるという例を紹介したあと、つぎのように続けます。

『一つの〈側面〉にすぎない独りの人は、単独では決して「人間」として存在することができないのです。… その人を支えているいくつもの見えない側面としての他者という支えがあって、初めてその人として存在しているのです』。この世界の中で、単独の〈私〉はどこにも存在せず、『いるのは、ただお互いを支え合っている〈私たち〉という存在だけ』なのです。私たちがこのことを日常的に意識できないのは、自分にとって大切な相手があばら骨から抜き取られたことに気づいていないからです。『神は … 人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた』からです。神さまは人が眠っている間にあばら骨を抜き取ったのです。また、『その跡を肉でふさがれた』のですから、抜き取られた跡さえ残っていないのです。

中川師は続けます。『本当の自分になるためには、「私から出て行った者」を追い求めて探し、出会わなければなりません。』と。そして『出会えた時に初めて「ついに、これこそ、わたしの骨の骨、これをこそ、女（イシュー）と呼ぼう。まさに、男（イチャー）から取られたものだから」と言って、真実の自己に出会うのです』。男は自分の身体から取られた〈あばら骨＝女〉と出会うことによって、また、あばら骨だった女はその中に自分がいた〈身体＝男〉に出会うことによって、〈本当の自分〉になっていくわけです。いくつもの〈側面〉に支えられている私たち。もっとも重要な〈側面〉が、あなたの〈大

切な人) なのです。

### 《祝福されている「性」》

神さまは『人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう』と、男に女をお与えになりました。また、『男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる』とあります。

『聖書』の世界では、男女の〈性〉を最初から神さまの《祝福》のもとに捉えています。『二人は一体となる』とは、男女の性の交わり〈性行為における一体性〉というだけでなく、同時に互いを「自分にふさわしい助け手」とする〈人格的な一体性〉を意味します。

性は人間の根本的な欲求の一つであることは説明するまでもありません。神さまはそれを祝福とともに私たちに与えてくださいました。

『裸になり、互いに何一つ隠すことなく、すべてを明け渡した男女の性の交わりは、独りでは生きていけない人間が、互いに支え合い、助け合い、一体となって人生をともに歩んでいくことを支え、深めるものです。性の交わりを通して、男女は、人生に疲れた心を憩わせ、その心を喜びで満たし、明日を生きていくための活力と希望をくみ取っていくのです。性の交わりを通して、愛する喜び、愛される喜びを深く確かめ合うことのできる男女は、どんな厳しい人生の試練に直面しても、それをくぐり抜けていくことのできる勇気をくみ取ります』。(カトリック司教団『いのちへのまなざし』)

人間は〈一つになる〉ことにより、肉体的な快楽を得るとともに、生きるために必要な〈こころのエネルギー〉を目の前の大切な人からいただき、自分もまた相手に同じものを返しているのです。その繰り返えしの中で、目に見えぬ存在に〈生かされている喜び〉を知り、その喜びを二人の間だけではなく、ほかの〈側面〉(自分たちを支えてくれる人たち)にも伝えていくことができるようになるのです。互いに向き合った二人が、その愛(お互いを大切にすること)を《愛といのちの共同体》へと拡げていくのです。

しかし、現実の性はどうなっているでしょう。性をめぐるさまざまな問題があふれています。豊かでたくさんの面をもつ人間から〈性〉だけを分断して、それをお金で交換可能な「商品」にする…消費社会の原理は〈モノ〉だけでなく、性の世界まで侵入しています。「自分の身体を自分で売って、なぜ悪いの?」という女子中高生の質問に、明快な答を返すことができるオトナたちは、どれほどいるでしょう。生殖としての性の側面は取り去られ、男と女の情緒的な愛(?)の表現(テクニック)としての性だけに焦点を当てて煽るマスコミを先頭に、商業主義があと押ししています。(ここ1~2ヶ月の『週刊P』と『週刊G』で連載されている特集記事をごぞんじですか? わたしは新聞広告しか見ませんが、それはそれは60代以上の男女を刺激するものです。)結婚・家族の絆の弱体化、不倫、離婚、…をはじめ、私たちが立ちどまって考えなければならないことがたくさんあります。

性については、まだ多くの説明が必要ですが今回はここまでとして、『わたしが・棄てた・女』に戻りたいと思います。

(以下の引用文は、文庫本の最終ページに『この作品は、今日の観点からみると、差別的表現ととられかねない箇所がありますが、当時の風俗、言語を残すために、やむをえざる部分のみ、それをそのままに致しました。作者の意図は、決して差別を助長するものではありません。また、ハンセン病（癩病）には、現在は特効薬があって、完全に治癒することを付記します。』とありますので、原文のままを書き写します。)

## 『手の首のアザ』（二） (p.156~175)

### 《「ハンセン病」の疑い》

ミツの手首にできた10円銅貨ほどの赤いアザは、少しずつふくらんでいきました。酒場に来る客から「医者に診せた方がいいよ」と言われても、とくに痛みもかゆみも感じないミツは病院に行きませんでした。でも、同僚の女の子から「うつされたら迷惑するわ」と言われ、近所の医者に見てもらいます。医者には『大学病院で血液検査したほうがいい』、『悪性のもんじゃないと思うけどね。念のためだよ』と言われます。「念のため」なのに、翌日店に医者から電話があり、大学病院の先生に連絡したから診察を受けるよう強い口調で勧められます。

雨の日、しかたなくミツは病院へ行きました。偉そうな先生と若い医者数人に囲まれながら診察を受けました。『輪郭性斑紋だな』と、ひと言。ワクチン注射法で検査し、注射痕を見た医者は「反応はない」と言う若い医師に対して、『おかしいな。しかし反応がないハンセン病もあるからな』とつぶやきます。検査後、廊下で待たされていたミツに、若い医師の一人が近づき、復活院療養所で精密検査を受けてほしいと言われます。ミツは先ほどの医者が言った〈ハンセン病〉という言葉が気になっていたのだから、『いや、なんにもあなたがハンセン病ときまったわけじゃないんだから』、『ただ、何と言うのかな。その疑いが少しだけあるので…』と言葉を濁しました。ミツにはその病気がいったいどんな病気なのかわからなかったのですが、〈ふつうの病気〉ではないことは何となく気づきました。『(小さなおできだもん。)(今まで放っておいてもなんでもなかったんだから)』と、たいした病気ではないと信じようと思いました。

帰ろうとしたら、若い看護師がミツが忘れた風呂敷包みを持ってきました。ミツはこの看護師の女性にもハンセン病のことを尋ねました。彼女は『ハンセン病…それ癩病のことじゃないかしら』と思わず口にしめます。ミツの顔色がさっと変わりました。

『太い槓の棒で頭をガアンと撲られたような感じで、ミツはその場に立ちつくした。病院の建物が突然、灰色になった。目の前でグルグルと廻転した。体中の力がぬけたようにミツは危く地べたに倒れそうになった。信じられない。自分がそんな病気とは信じられない』。『(夢。悪い夢、みてるんだ)』。

当時、ハンセン病は感染する病気であり、遺伝性もあると誤解され、不治の病とされてきました。ですから、患者さんは世間から完全に隔離され、当人はむろんのこと、その家族・親戚の方々も偏見の目で見られ、差別扱いされました。しかし、現在は癩菌の感染によって発症し、主に末梢神経が冒され、知覚マヒ、神経痛や皮膚症状のほか、脱毛、顔面や手指の変形などがおこることが判明され、有効な化学療法剤があり、治癒が可能になっています。

目の前にいる人たちの悲しみや苦しみを見ていられないミツが、自分も大きな苦悩を背負う立場におかれてしまいました。このときからミツの〈絶望とのたたかい〉が始まります。どん底に〈光〉は見えてくるのでしょうか。では、次回まで。

【引用した書籍】 ・日本聖書協会『聖書 新共同訳』 ・日本カトリック司教団『いのちへのまなざし』 ・遠藤周作『わたしが・棄てた・女』 ・中川博道『存在の根を探して キリスト教の基本を探る 第4回 独りでは自分になれない私』（『福音宣教』4月号、オリエンス宗教研究所、2013） ・『大辞泉 第二版』